

大山の茶湯寺参り

中島考二

平塚市をはじめとして相模川の下流域、大山の秀麗な山容を望み見られる地域を主体に、人が亡くなって101日目にあたる日に近親者が大山の茶湯寺にお参りするという習俗があります。百ヶ日にお参りするところもありますが、茶湯寺とは茶湯供養をする寺の通称で現在は大山の稲荷町にある涅槃寺、正式には誓正山茶湯殿涅槃寺という浄土宗の寺がそれにあたり、釈迦涅槃像（通称寝釈迦様）の前で参詣者の宗派を問わず茶湯供養が行われています。

稲荷町というケーブルカーの始発駅より下の土産物屋など並んでいるところで茶湯供養が行われるようになったのは明治以降のことです。それ以前の江戸時代には女坂の途中にあった「来迎院」で茶湯供養が行われ、参詣のしかたも現在とは異なっていました。

江戸時代には追分（男坂女坂の別れるところ）に前不動堂があり、ここから上は山上とって浄なる地域とされていました。来迎院も此の地域内にありましたが、明治の初めの「神仏分離」によりこの山上には神道のあらしが吹き荒れ仏教的色彩は一掃され、死にまつわる行事などは一切出来なくなりました。そこでやむなく追分から下の俗なる地域で茶湯供養が行われる様になり現在の茶湯寺参りの姿に変わったと考えられます。

来迎院は「女坂の右にあり、別当八大坊及び山上寺院の菩提寺で、土地の者は此の寺を茶湯寺と言っている。これは近辺の農家で人が死ぬと百ヶ日にあたる日に不動堂に参詣して死者の法名を書き出し、そのあと来迎院に来て茶湯を受けたので茶湯寺と言われているのである。又脇坊の光円坊でも同じことが行われている。」といった事が『新編相模国風土記稿』に書かれています。そのころは不動堂が山上の中心的存在でありました。不動堂から山頂の石尊社へ通じる参道には木戸が設けられていて夏山といわれる例祭の期間20日間を除き木戸は閉ざされていましたので普段の日の大山詣は不動堂までしか登れませんでした。ですから『風土記稿』でいう不動堂への参詣はとりも直さず大山に参詣したというように理解出来ると思います。

雨乞いや豊作祈願、豊漁や海上安全の祈願、商売繁昌、招福除災、若者が一人前の大人になるための初山、こう言ったもろもろの大山信仰の中で、「参詣する途中で亡くなった人とよく似た人に必ず会える」との言い伝えのある茶湯寺参りは、大山は亡くなった人の魂が行きつくところ、即ち大山を霊山とあがめる信仰の現在に残る姿であると考えられ、百ヶ日にお参りするということはその日が死者の魂が家を離れて大山に入り、ご先祖様の仲間入りをする日ととらえられていたのではないのでしょうか。

“茶湯寺には行かないで菩提寺にお参りしてすませている” “茶湯寺参りは知っているがその日は近所の人にお茶を振舞うことすませている” などの声を聞きます。又大山ではなく片瀬の竜口寺へ行くというお寺さんもあります。現在どのくらいの人が茶湯寺参りをしているか涅槃寺に聞いても教えてはいただけません。時おり涅槃寺に行ってみるのですが平日に比べ休日のお参りが多いように見受けられます。今の平塚市の大部分が農村であったころに比べて大分薄れては来ていますが今も茶湯寺参りは行われています。

人間は肉体と魂とが混全一体となった姿で生きていて、死ぬことにより肉体と魂とが分離する。そして分離した魂は永遠に生き続けると考えられ、魂は高い山の頂に止まって子孫を守ってくれるとも考えられます。田の神山の神の民俗信仰につながるわけであります。来世のすみかはいずこかと気になる年齢となった昨今、ご先祖様と一緒に大山の頂上から平塚を見つめながらすのすのなどと考えるみるとチョッピリたのしい気にもなるのですが如何なものでしょうか。



茶湯寺



発行//平塚市(文化行政推進室)

〒254-0045 平塚市見附町15-1

<http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/>

●お問い合わせ

施設利用に関すること TEL 0463-32-2235

事業に関すること(平塚市文化財団) TEL 0463-32-2237



FAX 0463-31-6466